

祐善寺だより

第26号

発行日
2011年7月10日

真宗大谷派 祐善寺 住職/岡崎 賢 福井県丹生郡越前町上糸生・森 TEL 0778-34-5170 FAX 0778-34-5170



『被災者の皆様に』

ああ なんと
いうことでしょう
テレビを見ながら
唯^{ただ}手をあわす
ばかりです
皆様の心の中は
今も余震がきて
傷痕^{きずあと}がさらに
深くなっていると
思います
その傷痕^{きずあと}に
薬を塗ってあげたい
人間誰^{たれ}もの気持ち
です
私^{わたし}もできることはな
いでしょうか？

考えます

もうすぐ百歳になる私

天国に行く日も

近いでしょう

その時は日射^{ひざ}しとなり

そよ風になって

皆様を応援します

これから 辛い日々が

続くでしょうが

朝はかならず

やってきます

くじけないで！

柴田トヨ

東日本大震災に憶う

住職 岡崎 賢

賢

去る三月十一日は、日本中に激震の悲鳴がとどろきわたった。あまりの惨状に言語を失った。自然の猛威に頭も心も叩きのめされた。いつしか、私の目にも心の中にも涙があふれた。東日本大震災である。

犠牲となられた我が同朋は、幾千万人。そして、今なお、津波の被害や原発の放射能被害によって、避難生活を余儀なくされている同朋も、幾千万人。生死が不明の同朋も数え切れない。かつて、私共は、これほどまでに悲惨な災害を体験したことがない。唯々、お念仏し、合掌するしかない。唯々、災害からの一日も早い復興を念ずるしかない。被災された方々が、一日も早く心安らかに休まる生活を取り戻して欲しい、と願わずにはいられない。

上の詩は、この六月で百歳になられた柴田トヨさんが、東日本大震災のあと、直ぐに発表されたものである。昨年、九十九歳で出版した処女詩集『くじけないで』は、百五十万部を突破し、ミリオンセラーとしては世界最高齢を更新した。

この詩には、百歳の年輪から湧き出るトヨさんの篤い想いがあふれている。人生を成就されているトヨさんの優しさ、満ちあふれている。被災地の皆さんへの、津波で犠牲になられた皆さんへの、柴田トヨさんからの百歳のプレゼントであるのだらう。

被災された皆さんが、一日も早く物心共に元気を取り戻されるようお願いいたします。

被災した環境が、一日も早く復興されることを願います。そして、傷つきたいのちが、一日も早く癒されるようお願いいたします。

宗祖親鸞聖人

七百五十回御遠忌

団体参拝に
70名参加!

東日本大震災 被災者支援の集い

本山（東本願寺）では、三月十九

日から二十八日まで、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌第一期法要が厳修されることになっていきましたが、直前の三月十一日に東日本を襲った巨大地震・大津波・原発事故等の激甚災害の現実を厳粛に見据え、宗派を挙げて災害救援活動に取り組むために、「被災者支援のつどい」として、法要が厳修されました。この法要に、当寺より十名、参詣しました。

参詣されたご門徒様より感想文をいただきました。

御本山参詣に思う

野村 明良
須美恵

先日宗祖親鸞聖人七百五十回忌法要記念催事に夫婦共に元気で参加させて戴き、身も心も引き締まる思いで大変感動しました。過去にも本山奉仕団に同行させてもらった事も何回か御座いますが、今回は特に思い出多い二日間です。今思い出しても心ほのほのとしております。

先ず初日は比叡山への参詣でした。ここは想像を遙かに超えていたのに吃驚、いろいろな上人様がここで修行なされたと聞き、その内容に言葉も出ません。自分はなんと愚か者かとあらためて痛感致しました。その後バスに乗って目指す京都へ。着いたホテルが三木半。この宿は老舗で大変趣のある所で、やっと我に戻った次第です。いやはや平和惚けもいとこだ。夜の食事では、他組の方々との交流も出来て、楽しい一時を過ごすことが出来ました。そして、二十七日、目指す本願寺へ一番乗りして、そこで先ず感動し



比叡山でガイドからの説明を聞くご門徒さん

たのは、中村久子さんの一生を紹介した写真の展示でした。中村さんは、手足の不自由なことにも負けることなく力強く生き抜かれた立派な方です。自分は五体満足が故に不平不満ばかり。これからは気を付けようとは思っけれど……。

そして御影堂へ。ここでもまた、吃驚。次から次へと人、人、人。改めて親鸞聖人の偉大さに頭が下がった次第です。続いて東日本大震災被災者支援の法要が始まり、寒い中ではありましたが、心から犠牲者のご冥福をお祈り致しました。

とにかく大変思い出に残る旅になりました。ちなみに我が夫婦は今年三月二十七日で結婚四十九年目を迎えました。これも何かの御縁と感謝しつつ、お互いよく我慢したものだと思いに励まし合いました。来年は結婚五十周年を何処でどんな形で迎えることが出来るかと、それを楽しみにしながらこの一年を過ごし

たいものだと思います。

「親鸞聖人御遠忌」に参加して

渡辺 千代一
和恵

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要は、東日本大震災のために被災された多くの方々に思いを馳せ、「被災者支援のつどい」という形で東本願寺において行われました。私達は三月二十六日から二十七日にかけて皆さんと一緒に参加させて頂きました。だが、「開会、総長、そして閉会」の挨拶も今回の地震災害のことばかりでしんどいと感じていました。地震、大津波、そして原子力発電所の実態……（もし敦賀の原子力発電所で事故が発生すれば越前町も二十キ口位なので着のままで避難しなければならぬのだと思う……）寒さと餓えに苦しみ、その上住まいにも不自由されている多くの被災者のことが頭に浮かんで心が痛み、身も凍るかと思うほど寒い本堂ではありましたが、心から手を合わせて真剣に祈らずにはおられない気持ちで



親鸞聖人が比叡山時代に苦行をされた常行堂

した。

また、親鸞展と中村久子展が同時に開催され、何れも強く心に残る展示内容でした。中村久子さんは、子供の頃の凍傷がもとで手足が不自由になられても多くの苦勞を乗り越えて結婚され、子供にも恵まれました。その上、久子さんは自分が努力してその苦勞を乗り越えただけでなく、全国を回って、同じ障害をもった人達を励ます活動もされました。それらの写真等を拝見して、とても胸が熱くなり感動しました。

一日目に雪の中で拝見した比叡山の延暦寺等では、ガイドさんから源信、法然そして親鸞の生い立ち、出会い、別れなどの説明を聞きながら知識を広めることが出来ました。冷たい風が吹かれての二日間ではありましたが得るものが多く、生涯忘れられないほど思い出多い旅でありました。有り難う御座いました。

東日本大震災被災者 支援のつどいに参加して

野村 範子

桜の便りも間近と思われる三月末、時節外れの小雪が舞う中をバスに乗り合わせて京都へ向かいました。初日は道路の両側に残る雪を見ながら比叡山へ登りました。そこではガイドさんの説明を聞きながら親鸞を



御影堂での法要開始前の一コマ

じめ沢山のお坊さん方が修行された様子を知り、深い感動を受けました。特に印象深かったのは二十九歳の親鸞が、比叡山で一日の修行を終えた夜、お山を出て京都の町中にある聖徳太子ゆかりの六角堂でお参りして、翌日の夜明け前には帰山するという大変な業を百日間も続けられたことです。これを百日参籠というのですが、普通の人にはとても出来ることではないと思います。

二日目には東本願寺での、被災者支援のつどいに参加しました。暖房はなく開け放された広い御堂の中は想像以上に寒く、手渡していただいた膝掛けと使い捨てのカイロを使ってもなお寒くて、体の芯から冷えるのを感じました。三時間程の間この寒さに堪えるのが精一杯でしたが、これ以上に寒い中で耐えておられる多くの被災者の方のことを思い、一日でも早く元の生活が出来るようになりそうですよにと願いをこめて、一杯大きな声で読経をしました。このように、いろいろな経験や勉強をさせて頂いた二日間でした。私事ですが、私が最も印象に残ったのは親鸞の叔父さんのお名前が範綱で

お父さんのお名前が有範、さらに親鸞のお若い頃のお名前が範宴というように、お三人も『範』の字が付いていることを知ったことです。今は私の亡き両親がどんな願いをもって私の名前を付けてくれたのかは知る由もありませんが、親鸞聖人様と縁のある名を授けてくれた両親に改めて感謝した旅でした。

比叡山延暦寺と 東本願寺へお参りして

野村 軍一

この度の東日本大震災で被災された多くの方々が一日も早く立ち直られることを願って、東本願寺で催された『被災者支援のつどい』に参加し、自分なりにいろいろなることを考え、多くのことを学ばせていただきました。

仏教の根本道場・比叡山では、延暦寺常行堂の中で常行三昧についての説明を受けました。その行は、堂中央に安置された本尊の周りを九十日間歩きながら「南無阿弥陀仏」を称え続けるとのこと。九十日の間は片時も座ったり横になったりすることは許されず、立ったまま、周りの柱に結わえつけてある竹竿にもたれ

て一日に数時間だけ休むことができたとか。粗末な食事はあったにせよ、身も心も疲れ果てる大変な行であることは容易に察しられます。また、冬場の寒さは想像以上のものであったらうと思えます。

九歳から二十九歳までの二十年も永きにわたって堂僧として比叡山で修行を積まれた親鸞は、常行三昧の他にも止観業、遮那業、回峰行など数々の行と積極的に取り組まれたと考えられています。両親を「くっ、幼い四人の弟と離れて比叡山に籠った親鸞の修行は、文字通り命を懸けた真剣そのものであったに違いありません。

しかしそれでもなお、親鸞は求める境地に到達することはできませんでした。どんなにかもたえ苦しみ、悩まれたことでしょうか。親鸞はこの後、吉水で生涯の師である法然の弟子となり、さらに研鑽を積み重ねました。私は縁あって今回、比叡山と東本願寺へお参りさせていただくことができましたが、お山でもお御堂でも、三月下旬とはいえ今冬一番の厳しい寒さを感じました。配られたひざ掛けと使い捨てカイロを使いながらも寒さに震えつつ、親鸞様のお山での修行の厳しさの万分之一でも体感できたような気がしました。そんな中で、知らず知らずのうちに今までになく力を込め、真剣になって正信偈

を唱えている自分を感じました。有難いことです。不思議なことに、あの広い御堂での厳しい寒さが、親鸞様をより身近に感じさせてくれたのかも知れません。有難いことです。

本山への団体参拝に参加して

上野 みよ子

本山での「被災者支援の集い」に参拝させていただきました。三月も終りなのに寒い雪の朝です。祐善寺御住職御同朋の方々と共にバスにて出発。福井教区七台のバスが賤ヶ岳に集合です。福井教区一行に看護師が同行して下さり車椅子も準備されていました。



本山御影堂には「被災者の集い」の大きな垂れ幕が吊られた

予定通り賤ヶ岳を後に比叡山へ着き延暦寺参拝。親鸞聖人御修行の工ピソード「そば喰い仏像」など御修行の様子を専門のガイドさんからくわしくお聞きしました。険しい坂道を登り下り御修行に励まれた毎日が

この日は比叡山にも雪が降り京都に来て雪なんてと思いましたが、延暦寺周辺の雪景色も又格別な思い出になるでしょう。宿泊のホテル着は四時三十分頃でした。夕食まで市内散策、六角堂参拝など自由な時を過ぎ事が出来ました。夕食は福井教区一同大広間に盛大な宴会で素晴らしい京料理のいろいろ、朝食も大変おいしくいただきました。早朝、ホテル出発いよいよ御本山到着です。幸い今朝は暖かい日も射し参拝日和でした。朝早くからそれぞれの部所で皆さん一生懸命働いていらつしやる姿に頭の下がる思いでした。御修復の終わった御影堂の荘厳さは又格別。御遠忌を迎えられる大事業の偉大さに心を打たれました。

つづいて御門首始め役員の方々から外陣に着かれ、全国から参拝された同朋ともどもに正信偈念仏和讃の唱和を勤めさせていただき感動一入でございました。御教えのむずかしい事はよくわかりませんが人と人とのつながり出会の大切さ、「南無阿弥陀仏」のお陰様をいただけたかな、チョッピリでも真宗本廟に参拝させていただいた思いでございます。最後になり申し訳ございませんが、御住職、若任職様、御同朋の皆さま、老人がお仲間入りさせていただいてお世話になりました。本当に有難く厚くお礼申し上げます。又お寺様でお目にかかれると思います。今後ともよろしくお願い致します。

本山への団体参拝に参加して

桑原 文子

三月二十六日～三月二十七日の二日間、東本願寺へ御遠忌団体参拝させていただきました。バス七台で京都へ向かいましたが、この日は春とは程遠くとても寒い日でした。私たちのバスのお世話をしてくださったのは、祐善寺のご住職様と若ごえん様でした。寒さ防止のホッカイロや声かけ等、温かい心遣いをいっぱい、いっぱいしてくださいました。バスの相席の方は祐善寺のご門徒の顔見知りの人だったので心楽しく過ごせました。東本願寺参拝の前に比叡山参拝をしました。比叡山ドライブウェイの辺りから真っ白の雪が降り出し、木々の枝にふんわり積もる雪、比叡山延暦寺に降る雪の風景は感動ものでした。今もなお、目に心にと残っています。



本山での「被災者支援のつどい」に参拝したあと全員で記念撮影

祐善寺のご住職様、若ごえん様、門徒の皆様のおかげで今回参拝できました事を感謝しお礼申し上げます。お寺さん、門徒の皆さんと一緒に席を同じくしてゆつくりとお話をしたり、お話が聞けたりしました事はとても良かったと思います。若ごえん様は、歳を重ねた私たちにも、とても優しく接して下さるので笑顔になります。これからもよろしくお願いたします。



ご門徒さんの懸命な除雪作業が続けられた

豪雪の中での 雪下ろし 有難うございました



雪国ですから例年雪は降るのですが、今年の雪は格別に多く、夜など建物の中にいると柱や屋根がきしむ音が聞こえるようで、何とも不安な思いでいました。しかし何日も何日も雪が続いて、もうこれ以上降ったら危険であると判断して役員さん等にご相談しました。すると、「それは大変だ」ということで、早速必要な手配をして下さり、雪下ろしをお願いできることになりました。

作業当日の一月三十一日は、早朝から女性を含む沢山のご門徒さんがスコップやスノーダンプを持ってぞくぞくと駆けつけて下さいました。それぞれに連日にわたるご自宅での雪下ろし作業でお疲れの方ばかりです。本当に有難いことです。そんな皆さんのお姿に、おのずと頭の下がる思いでした。

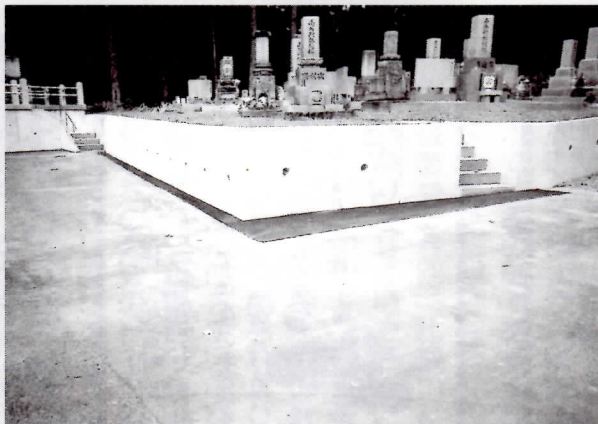
屋根の雪は思いのほか多く、作業は大変だったのですが、皆さんのご努力でお昼近くには終えることができました。皆さん、さぞかしお疲れのことだったでしょう。本当に本当に、有難うございました。

墓地擁壁工事が寄進により完工

祐善寺の境内地にある祐善寺墓地は、雨水等によって土手の浸食が目立つようになってきました。このことに、墓地使用者の一人である桑原文子様(鯖江市杉本町)から、このまま浸食が進めば、将来、お墓が倒れてしまうのではないかと、ということをご心配され、ご相談を受けました。

住職が桑原文子様とご相談をさせて頂いていただいている中で、桑原様は「亡くなった主人が生きていたら、きっと、放つてはおかないだろう」と、ご生前中、寺の法護護持に尽力されたご主人の想いを憶念されて、「亡くなった主人と二人で擁壁工事を寄付させてもらいます」との有難いお申し出をいただきました。

このお申し出を役員会で協議して、本来ならば祐善寺の事業として改修工事を施工しなければならぬところ、墓地永代使用料は現状での使用を前提に低く設定されていることから、墓地擁壁等の改修工事まで検討することが困難な状況であり、桑原様からの墓地擁



墓地擁壁工事により周辺の環境も一変した

壁改修工事一式のご寄付のお申し出を有難くお受けさせていただくことにしました。
墓地擁壁改修工事は完工し、墓地周辺の環境は、見違えるほど整備されました。
一昨年の祐善寺総墓移設事業と相俟って、境内・駐車場一帯の環境が一変しました。
桑原様からのこの尊いご懇念をご披露させて頂きますとともに、整備された墓地一帯の写真を掲載させて頂きます。

花だより



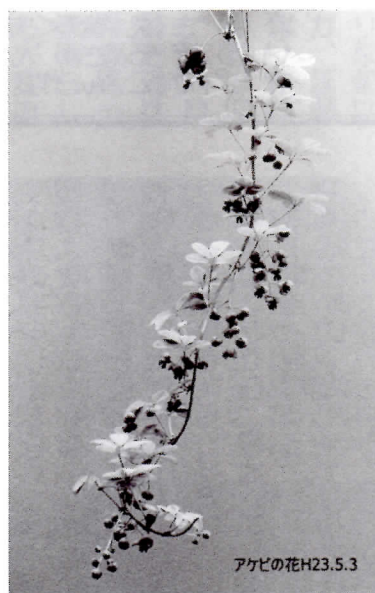
今回はアケビの花です。左の写真はアケビの雌花ですが、朝早く写したのでまだ夜露が残っており新鮮な雰囲気の写真になりました。花の中央に短い棒のようなものが数本見えますが、秋にはこの中の一本か二本

が大きなアケビの実になるのです。

ところで雄花は……って思われるでしょうが、よくご覧下さい。雌花の下で葉に隠れてひっそりと小さく丸く咲いているのが雄花です。大きさの面からいっても、色や形の面からいっても、雌花と比べて随分と控えめな感じですよ。実はね、男が控えめなのは我が家だけのこととばかり思っていたのですが、どうやらそうではなくてアケビの社会でも同じらしいことが分かったのです。いや、アケビの社会は我が家以上かもしれないですね。私はこの写真を見ると、何故かほっとした気分になれるのです。

アケビ雌花

「同病相憐れむ」という言葉がありますが、まさにそんな気分です。ついでに下の写真もご覧下さい。これも同じアケビの花ですが、一番上でたった一つだけ威張ったように咲いているのが雌花です。この一つを除いて、他はすべて雄花なんです。雌花一

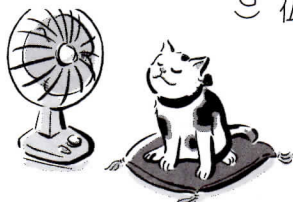


アケビの花H23.5.3

アケビ雄花

つに対して、雄花がなんと多いことですよ。雄花にとつては大変な競争率です。

私はこれを見てつくづく思いました。『ああ、私は人間社会に生まれることができて本当に良かった。これを阿弥陀様のお陰と言わずに何と云おうか。何かの間違いで、こんなにも競争が激しいアケビの社会に生まれていようものなら、大きな顔が出来ないどころの問題ではなく、第一結婚さえもあよびでなかつたらうに……。』とね。やっぱり、大事にして感謝しなきゃ罰が当たります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。(G)

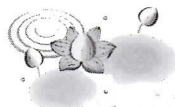


おくやみ

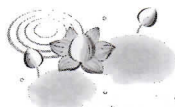
佐々木コズエ様(越前町織田)には、平成二十二年九月二十五日、行年八十二歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。



木村勇様(越前町森)には、平成二十二年十月二十七日、行年七十八歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。



福田静雄様(坂井市坂井町)には、平成二十三年五月二十一日、行年九十一歳にて往生の素懐を遂げられました。ご生前のご功勞に、心より深謝申し上げます。



第1回 御伝鈔講座

それ、聖人の俗姓は藤原氏、天児屋根尊二十一世の苗裔、大織冠鎌子内大臣の玄孫

親鸞聖人の出家以前の名字は藤原氏である。天児屋根尊から二十一代の子孫、官位の最高職であつた藤原鎌足内大臣の孫の孫で

近衛大将右大臣贈左大臣従一位内膳公 号後長岡大臣、或号閑院大臣、贈正一位太政大臣房前公孫、大納言式部卿真楯息

近衛大将右大臣贈左大臣、従一位藤原内麻呂公（この方は、後長岡大臣、或いは閑院大臣という正一位太政大臣房前公の孫、大納言式部卿真楯公のご子息でもあつた）の

六代の後胤、弼宰相有国卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり。

六代の子孫、藤原有国卿から五代の子孫、天皇の母の給仕をする職、日野有範の子である。

其の22

仏事 一口メモ

通夜までの心得(5)

自宅に通夜・葬儀を営む場合、納棺が終わりますと、すぐに式場の準備にかかります。派手な装飾品などは取り除き、衣類など必要なものは取り出しやすいところに用意しておきます。着替えや休憩のできる住職の控室も必要です（室数がなければ、式場に控え席を用意します）。

自宅以外の会場（寺院や会館など）で営む場合は、会場側とよく相談して式場作りを行ってください。

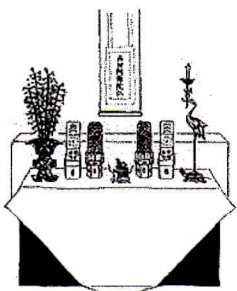
次に斎壇（壇飾り）についてお話しします。斎壇の荘厳（お飾りのこと）は、今日、ほとんど葬儀社が行ってくれます。しかし、浄土真宗にそぐわないお飾りも見受けますので、心したいものです。

浄土真宗の通夜・葬儀は、ご本尊を中心に行います。ですから、ご本尊は参列する誰もが拝することのできる中央上部に安置し、その手前にお棺を置きます。早いうちに住職に相談し、ご本尊をお迎えしましょう。

昨今、通夜・葬儀にお参りしますと、斎壇の壇数を多くしたり、種々の飾りつけをするなど、豪華さはかりが目につくようになりました。

古来、葬儀は、「野辺の送り」といって、自宅から葬列をくんで葬場に向かい、そこでお勤めするために野卓に三具足（紙花・お香・口ウソク）を用意してお飾りしました。その野卓が、現在では屋内に設ける葬儀壇の基本になるわけです。ですから、浄土真宗の通夜・葬儀では、本来、壇飾りの必要はありませんし、華美に飾ることもありません。

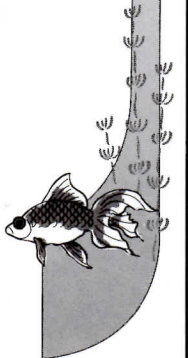
ご遺族の心情として、立派な斎壇にしてあげたいという気持ちはよくわかりますが、それにとらわれてしまうと、何のために通夜・葬儀を行うのか、その大切なことが見失われてしまいます。また、最近では、写真を飾ることが一般的になってきました。写真の陰になつてご本尊を拝することができない場合もあります。礼拝すべきは、写真ではなくご本尊です。本来は必要ないものですが、写真を置く場合には中心からずらすなどの工夫が必ず要でしょう。



祭壇（野卓）

「サンガ」より

お知らせ



永代経会

八月七日(日)

十一時半

御齋

一時

アトラクション

スコップ三味線 ほか

(小倉福寿会の皆さん)

二時

永代経会法要

二時半

布教 徳永寺住職

平等明信師

三時四十分

物故者総墓収骨

永代経会とは、亡き人から願いをかけられて生かさせて頂いていることに、感謝申し上げます。法会であります。

このかけがえのない法会に、ご家族、ご法友お誘いあわせの上、何卒ご参詣下さいますようお願い申し上げます。

ボランティア募集!!

寺周辺の

草刈り作業奉仕

日時 七月三十一日(日)

八時集合

持物 草刈機もしくは鎌、軍手等

昼食 用意します

傷害保険 加入します

雨天 決行します

炎天下で恐縮ですが、ご協力頂ける方は、三十日までには祐善寺までお電話下さい。

草刈り作業のみならず、刈り草運びや草むしり等の作業もありますので、どなたでもご協力いただけます。

皆様、ごつかよろしくお願ひします。



ボランティア募集!

祐善寺納涼祭のオーケストラボランティア

ご先祖様の前で、夏の日の楽しい思い出を残すことを通して祐善寺を活性化し、併せて各家庭で失いかけているお念仏ある暮らしを取り戻そう!をテーマに、昨年より実施している「祐善寺納涼祭2011」の運営に協力していただけるボランティアを募集しております。

左記の通り、お手伝いしていただけることはたくさんありますので、皆様、ご協力下さいますようお願いいたします。

記

日時 七月二十三日(出) 十時集合

内容

- ① 流しそつめん会場準備、食材の調理、流しそつめんの運営等
 - ② パーベキュー会場準備、食材の調理、パーベキューの運営等
 - ③ ビンゴ大会会場準備、景品の準備、ビンゴ大会の運営等
 - ④ 震災支援バザー会場準備、バザー提供品の値付け、バザーの運営等
 - ⑤ 納涼祭会場準備、湯茶の用意、受付、食器等の準備、記録等
- 持物 軍手、女性IIエプロン等
 昼食 用意します。
 傷害保険 加入します。
 申込み お手数ですが、七月二十一日までに祐善寺へお電話下さいませますように。

編集後記

★三月十一日午後二時四十六分に発生した東日本大震災は、地震だけに止まらず津波、福島第一原発事故まで発生し、おびただしい尊い命が失われ、数カ月たった今も行方不明者の人数は把握しきれていない。家を失い、家族を失った被災者の人々に、私たちは一体何ができ何をすればいいのかと、考えを思い巡らす日々が今も続いている。

★東日本大震災の復旧、復興に全力を注ぐべき大事な今、政争に明け暮れていないで、与党も野党も被災者の立場に立ち、譲り合って必要な政策を実施してほしいと国民は強く望んでいる。

★電力不足が懸念される中、今までの警沢を反省し一人ひとり節電に心がけて過ぎしたい。

★東日本大震災から三カ月過ぎた日曜日、ある吹奏楽団の定期演奏会で「日は昇る」と言う曲を聴いた。指揮者から、この曲は震災を知った作曲者が作られた曲だと話され、その方のメッセージを読まれた後、演奏が始まった。困難は必ず克服される、日本の夜明けを感じさせる、との作曲者の想いが会場中に染み渡り、祈る想いで聴き入っている人々の息づかいが伝わってきた。希望の光が差し込み、音楽は人々を元気づけると思った。(F.K)